

# 育 教 兒 幼

號五第・卷四十二第

ま 一 二

子ども達といつしょに繪を描いて居る。

「先生……」

A先生は、夢中になつて林檎の色を塗つて居る。

「先生……」

返事がない。

「クスく……」

「く……」

「どうなすつたの……」

A先生は、始めて氣がついて、繪から目を離して子ども達に尋ねた。

「でも先生、さつきから、いくど先生々々といつても、ちつとも御返事がないのです

もの。御自分の繪ばつかし描いていらっしゃ……」

「あら、そうでしたか。御免なさいね。でも、まあ一寸此の林檎を見て下さい。こゝのところが、どうじても、うまく色が出ないのですよ。皆さんのは……」

子ども達は、眞面目な顔になつて、もう一度、自分達の繪を見た。

B先生の顔色は見る／＼蒼白味を帶びて來た。目には涙が一ぱいになつて居る。

春子が、またいつものづるを出して居るのである。

B先生は、春子の此の卑しい性癖に就て、何より憂いて居るのである。どうにかしてなほしてやりたいと始終苦心して居るのである。この次こそは、うんと叱つても見なければならないとも、いつでも思つて居るのである。けれども、其の場になると、一目の前に、そのいつものづるい性癖を見せつけられると、小言も、矯正法も、どこへか行つて仕舞つて、たゞ、身が立ちすぐる様になるのである。

B先生は、指さきを震はせながら、急に春子の手を握つた。そして、無言のまゝ裏庭へつれて行つた。

そこには、大きな古い樹があつた。B先生は春子を押ししつける様にして、自分も其の樹の根に座つた。春子は、驚いて目を見はつて居る。

その春子の肩を抱きしめて、B先生は、頭を垂れて黙禱に入った。(倉橋生)